

くじら日記

太地町立博物館から



「夢を叶えるなら、ここしかない」。太地の広い海で鯨類が飼育される光景を初めて目にし、その時沸き起こった感情をこう振り返るのは、埼玉県加須市出身の水上空冴さん(20)。「ヒゲクジラの飼育」に強い思いをもつ、新人飼育員です。

鯨類は口の中に歯があるハクジラ類と、採餌に役立つヒゲがあるヒゲクジラ類の2つのグループに大別できます。ヒゲクジラは比較的大型で、現在飼育している施設は一つもありません。飼育されている鯨類、例えばバンドウイルカやベルーガ、シャチなどは、全てハクジラになります。ヒゲクジラの飼育に夢を馳せたのは、動物と海洋を学ぶ専門学生だった時。出会った著書「海獣水族館―飼育と展示の生物学」(村山司氏、祖一誠氏、内田詮三氏編著)の次の一文を読んだことでした。

「海には水族館では未飼育

飼育員の思い⑤

の魅力ある種が満ち満ちている。ミンククジラ、ザトウクジラなどのヒゲクジラ類(中略)の飼育展示をすれば水族館の状況は一変するであろう」というものです。

「大きく存在感があるにも関わらず、見たこともない遠い存在。もし、水族館で誰も見られたら」と、今までにないほど気持ちが高揚したと言います。それからは、専門学校で鯨類飼育の基礎を学びつつ、独学でヒゲクジラ飼育について調べました。

米国のシーワールド・サンディエゴでは、ヒゲクジラ類の一種、コククジラが過去数回飼育された実績があり、そのうち1997年に保護された1頭は、放流されるまで約14カ月間の飼育に成功しています。

その餌やりの様子を映像で見た水上さんは、「まるで異次元。ヒゲを使って特徴的な餌の食べ方をする生態を飼育

下で再現し、餌付けに成功していた」と、驚きと感動を振り返りました。

国内では、静岡県沼津市の伊豆・三津シーパラダイスがミンククジラの飼育を試み、飼育の可能性を言及しています。その搬入から飼育初期の

試行錯誤が記された論文「伊豆・三津の水族館で保護された4頭目のミンククジラ―飼育経過―」を読んだ水上さんは「やろうとしていたことは険しい道と知った」と当時の心境について話します。こうして今年4月、書き上



ヒゲクジラの飼育への思いを語る水上空冴さん

けたレポート「ヒゲクジラの飼育」と大きな志をもって、くじらの博物館の飼育員に就きました。ただ、飼育員として実際に動物と向き合うと、初めて知ったり、感じたりすることも多くあったそうです。餌づくりや掃除などでは、覚えることと作業の多さが、「大変な仕事だと知っていたが、その100倍は大変だった」と弱音を漏らしました。また、動物が命を落としたり、居合わせた時には「唐突で、命の儚さを知った」と命を預かる重責を実感したようです。

戸惑いながらも水上さんは、「今の自分では、ヒゲクジラを飼いたいと言っても口だけになってしまふ。できることを一つ一つ増やして、その時」のために、成長しなければならぬ」と決意を込めて話しました。

(太地町立くじらの博物館館長 稲森大樹)

できることを増やし成長